

外来 V F (嚥下造影検査) について

- ・食事の形態をUPしたい。
- ・最近、ムセることが増えてきた…
- ・喉詰まりしそうなことも怖い…
- ・この食べさせ方で大丈夫かな…？

→こんな症状ありませんか??



《嚥下造影検査 (VF) とは》

飲み込みの過程やその状態をより正確に評価するための検査です。バリウムを混ぜた食べ物を実際に食べて頂き、X線透視下でビデオ撮影を行います。評価だけでなく、より安全な食べ方や飲み込み方の工夫について指導や提案も行います。



《検査の概要》

毎週水曜日 14:00～ **(※完全予約制)**

医師、看護師、放射線技師、言語聴覚士等の専門職が立ち合います。

※検査の前に一度リハビリ科を受診して頂く必要があります。

《検査結果について》

結果は検査終了後にその場で医師からご説明します。
また別途報告書を作成し、後日郵送します。



《お申し込み方法》

下記窓口へお電話やメール、もしくは直接稜北病院 1F 受付窓口で「外来の嚥下造影検査を希望します」とお申し出ください。
担当者から日時や詳細についてご案内致します。

《検査に関するお問い合わせ先》

道南勤医協 函館稜北病院 リハビリ部 言語聴覚科

電話：0138-54-3113 / Mail：t-shikanai@donank.jp

受付時間：月曜日～金曜日 (※祝日を除く) 9:00～17:00



これまでにあった事例を一部ご紹介します。

【①食事の形態が向上したケース】



「口からだけでは栄養は摂り切れないだろう」と他院で胃ろうを造設し娘さんの待つ自宅へ退院したAさん。口からはプリンならOKと指導を受けたことから、本人が食べたいと言った時はプリンだけを食べさせるようにしていました。その後の経過の中で入院中よりも徐々に活気が出てきて、もう少し食べさせられそうな気がするけど、誰に相談したら良いのかわからない…と困っていました。担当のケアマネージャーが気づき稜北病院外来VF窓口へ相談。リハビリ科の受診を経て検査を実施。その結果、少しづつであればお粥や柔らかい食事でも試してみても良いとの判断となりました。本人・家族ともにプリン以外のものへもチャレンジすることができるようになったことで、食べることの楽しみが広がりました。

【②ムセが減少・改善したケース】

当クリニック受診時に「最近ムセが多くなってきた。けど柔らかい食べ物にするのは嫌だ」と訴えたBさん。担当医師から外来VF窓口へ相談があり、リハビリ科の受診を経て検査を実施しました。その結果、食事時の食べ方（口へ運ぶペースや一口の量の調整）や飲み込み方（顎を引く、食事の最後は水で締める等）を工夫することで、現在の食事形態はそのまま継続可能との判断に至りました。その後は指導内容を遵守しながら食事を進めていることでムセは徐々に減少しているそうです。



【③誤嚥の早期発見・治療へつなげられたケース】

施設入所中のCさんから「もう少し形のあるものを食べたい」との希望が聞かれたため、施設職員が外来VF窓口へ相談。リハビリ科受診を経て検査を実施しました。その結果、ムセのない誤嚥（不顕性誤嚥）を認め、想定よりも嚥下障害が重度であることが判明しました。ご希望である食事形態の向上には至らなかったものの、誤嚥性肺炎対策として食事中及びその他の日常的対策（例：計画的な口腔ケア、離床時間の確保、栄養管理等）について施設職員へ指導と資料提供を行い、かつケアマネージャー及びかかりつけ医療機関へも報告書を送付し情報提供・共有を行いました。



上記のようなケース以外にも、口から食べることに関する評価・指導を実施しております。もしお困りの点があれば表面の連絡先までお気軽にご相談下さい。